

朴 花美 複合動詞の歴史的研究

——「ㄱ사스」「ㄱ야ム」と「타치」「ㄱ타ツ」を中心に——

——学位請求論文——

I 論文要旨

朴 花美

単語をその構成より見ると、「單純語」と「合成語」があり、合成語の中には、複合語 (compound word) と派生語がある。本稿では、複合語の中でも、「動詞の連用形 + 動詞」の形をとる複合動詞の「ㄱ사스」と「ㄱ야ム」および「타치」と「ㄱ타ツ」を研究の対象にする。

研究の方法は中古・中世・近世の文学作品を中心に複合動詞の意味分析に合わせて複合動詞の認知度のアンケートの実施・分析を行う。

本論第一章では、上代における複合動詞の存在の有無について、いまだにはつきりしたことは言えないが、少なくとも現代語の複合動詞のようなものではなくて、単なる

動詞の連接であつたと推測できることについて述べる。構成要素となる動詞の前項と後項の意味関係は、中古以前では補助関係が主で、中世・近世になると修飾関係に次第に転じてきたと思われ、現代語では、前項と後項の結合が古典語より強くなり、「連用形 + 終止形」のみが、一般に複合動詞として認められる形となっている。

第二章と第三章では、中古によく使われていた〈中止〉の意味である「ㄱ사스」を対象にし、現代語では使われなくなっている原因、さらに同じく〈中止〉の意味を持っていた「ㄱ야ム」との比較をした結果、以下のことが判明した。

- ① 「ㄱ사ス」という複合動詞は中古前期から現れはじめ、〈途中でやめる〉の意味で、幅広く使われている。
- ② 「ㄱ야ム」の場合にはさまざまな制約があり、「おもひ

などの限定された他動詞あるいは自動詞、さらに自然現象・音・声・生理現象の表現に限って〈中途局面〉と〈終結局面〉を表すのに使われている。また四段自動詞「ゝヤム」には他動詞的な意味もあり、他動詞として使われていたことも知ることができた。

③「言ひサス」と「言ひヤム」などの意味の違いを調べた結果としては、「ゝサス」は、直前に行われていた前項動詞の動作をやめるという意味で多く使われたが、「ゝヤム」の場合は、完全に今までやってきた動作すべてをやめるという意味に使われていたことがわかった。

このように中古末までは「ゝサス」の方が「ゝヤム」より多く使われていたが、中近世になると「ゝヤメル」という他動詞の形が、「ゝサス」より多く使われるようになり、「ゝサス」は、〈中途局面〉の意味だけに用いられるようになったと推測される。しかし、〈中途局面〉にあたる〈中途でやめる〉の意味は「ゝカケル」という表現にもなるので、現代語では「ゝカケル」を用いることが多くなり、「ゝサス」の表現は次第に使われなくなる。つまり、「ゝサス」の代わりに、〈終結局面〉の場合には「ゝヤメル」を、〈中途局面〉の場合は「ゝカケル」の表現を用いることになったと考えられる。

第四章では、前項動詞と後項動詞の順番が変わっている

複合動詞に注目した。その中で、「立ちゝ」「立ちッ」を中心に、意味関係を見ながら、原因と特徴を調べた結果、語順が変わっても意味の変化を伴わない対等関係の構成の複合動詞の中にそれが多く見られることがわかった。また、複合動詞の前項と後項の意味関係が、中古には補助関係から修飾関係へ変わったので、意味の中心も前から後ろに移ったということも先行研究によって知ることができた。もう一つは、二字漢語を翻訳する時、「わらふ・いふ↓いひわらふ」「かかやく・ひかる↓ひかりかかやく」の「短音節+長音節」の形式になるように前項と後項とを転倒したということも知ることができた。

第五章では、複合動詞の「前項動詞」の意味が薄くなつて「接頭語」のように使われている場合の、「接頭語（動詞の連用形）+動詞」の形を取るものが複合動詞として認められるかどうかについて考察した結果、一般に〈接頭語〉には、「尊敬」とか「強調」の意味を添える機能があるが、複合動詞の前項動詞は、「強調」の意味はあるものの、「尊敬」の意味などを添える機能があるとは考えにくい。それゆえ、「接頭語化」と「強調化」とを区別した方がいいと考えられる。

さらに、「前項動詞」は「接頭語」とは異なつて、意味が薄くなつていても本来の実質的意味が残っているし、単

独用法としても働いている。

辞書に「接頭語」とされている複合語の中にも同じ意味で前・後項動詞の順序が変わっているものがある。「前項動詞」が「接頭語」として働いていると考えたと、前・後項動詞が対等関係の構成ではないので、順序が替わることはあり得ない。しかし実際には順序が入れ替わっている複合動詞もあるし、意味も同じであることから考えれば、「前項動詞」は「接頭語」とは違う性質を持っているということになる。本稿では、このように「接頭語化」した前項動詞を「文法化前項動詞」と名づけることにした。

第六章では、複合動詞の「後項動詞」の意味が本来の意味より抽象化・形式化した場合には、「後項動詞」は「補助動詞」にも「接尾語」にもかなり近いものとなる。このような理由で、「後項動詞」を「補助動詞」として扱っている研究者も多いが、前項動詞との結合度や、後項動詞として用いられたときの意味の違い、用法の差を考慮しなければならぬと思われる。

「接尾語」との関係も「単独では成り立たず、必ず前接語と結合して一語を作るし、動詞以外の語を動詞化する」と云われている「接尾語」に比べると、「後項動詞」は意味が薄くなっているとしても、完全になくなったのではないし、他の構成要素と接続して動詞を作る「接尾語」とは

違って、「動詞」と接続して「動詞」を作っているという点では、複合動詞の「後項動詞」とは区別するべきであろうと思われる。本論文では、「文法化後項動詞」と名づけ、「補助動詞」「接尾語」とは別の扱いをしていくべきではないかと考える。

以上、複合動詞のうち、幾つかの複合動詞を中心に考察してきたが、今後は、「ゝサス」が「ゝカケル」に使われるようになった原因を探ってみたいと思う。さらに近世以後の複合動詞の意味を見ると、中古時代には無かった意味で使われている複合動詞が多いことに気がつく。このように意味が拡張している複合動詞について、研究を進めて行きたいと思う。

今回の用例の考察にあたり、中古の複合動詞の意味考察には東辻保和氏の『平安時代複合動詞索引』が大変参考になった。しかし、中世・近世の複合動詞の用例の採集には纏まった索引がなかったので、不便なところが多かった。それで、『大蔵虎明本 狂言集』『エソボのハブラス』『捷解新語』の索引を基にして、『複合動詞の逆引き索引』を作って参考資料として添えることにした。

今後は、このような索引作成の作業にもあたって行きたい。

Ⅱ 審査報告

審査委員

(主査) 専修大学文学部教授 林 義雄

専修大学文学部教授 鈴木丹士郎

専修大学文学部教授 永瀬 治郎

本論文は、二つの動詞の結合によって形成される日本語の複合動詞を研究対象として、その形成要素となる前項と後項の動詞に対する意味分析・両者の語順の問題・一方の形式化の問題などについて、主に歴史的な観点から考察を加えたものである。

論者は「はじめに」の中で、複合動詞の研究には共時的な視点から言語現象を静的に扱うものが多いが、言語現象を動的なものとして解明するには通時的な視点に立つ必要があることを述べており、このような動機によって設定されたテーマには、博士論文として取り上げるにふさわしい問題性と目的意識が十分に備わっているものと認められる。本論文は、Ⅰはじめに・Ⅱ序論・Ⅲ本論・Ⅳ結論・Ⅴあとがき・Ⅵ注・Ⅶ参考文献・Ⅷ付録の八部から成り、本論は次の六章によって構成される。

三・一 複合動詞の意味の概観

三・二 「ㇿサス」の歴史的意味考察

三・三 「ㇿサス」と「ㇿヤム」の歴史的意味考察

三・四 「タチ」と「タツ」の歴史的意味考察

三・五 複合動詞の前項動詞と接頭語の関係

三・六 複合動詞の後項動詞と補助動詞・接頭語の関係

上記「本論」に「はじめに」「序論」「結論」を合わせ、これに「注」と「参考文献」を加えると、本論文の本体は四〇〇字詰め原稿用紙に換算して三〇〇枚を越える力作となる。さらにこれとは別に、本論文の基礎データとして作成された「複合動詞逆引き索引」四〇枚が「付録」として巻末に添えられている。

序論は二・一「合成語と複合語」、二・二「複合動詞」、二・三「まとめ」の三節から成る。二・一では「合成」と「複合」の概念規定を行い、二・二では複合動詞の形態的分類に関する先行研究を概観し、二・三では複合動詞を結合形態および意味の面から四類に分類し、構成要素の機能の面からは三類に分類すべきであることを説き、本論においてもこの分類を根底に据えた論述が展開される。論文の構成に関して周到な配慮が窺われるとともに、論者の複合動詞に関する見解が盛られている点に評価すべきものが認められる。

本論三・一「複合動詞の意味の概観」では、上代から現代までを四期に大別し、それぞれの時期における複合動詞

構成要素間の意味関係の歴史的变化を概観し、前項と後項の間に補助関係から修飾関係への推移があったことを指摘する。

三・二「『くサス』の歴史的意味考察」では、かつては「中止」の意味を表す複合動詞後項として用いられていた「くサス」が、現代語では使用頻度を大幅に減ずる傾向にある状況を確認した後、これがいかなる前項動詞と結合するかについて、上代から近世に至る三〇の文献によって調査し、この後項動詞が中世以降次第に衰える傾向を見せることを指摘する。

三・三「『くサス』と『くヤム』の歴史的意味考察」は、「中止」の意味を表す類義関係にある後項動詞「くサス」と「くヤム」を取り上げ、両語に使い分けが見られるかどうか、もし使い分けがあるとすればそれはどのような基準に基づくものかを歴史的に考察したものである。その方法として、まず異本の多い『狭衣物語』を対象に、諸本間における両語の異同関係の調査を行うこと、次に「くサス」の使用が見られる中世から近世に至る文献の中から用例を求めて「くヤム」との意味の比較を行うことにより、この問題を解明しようとしたものである。その結果、前者については、複合動詞の前項動詞に応じて両語が使い分けられる傾向が強い一方、異本による異同関係においては両語が混用される例もわずかながら認められ、また後者について

は、寺村秀雄氏の「動的事象の諸相」を参考に、両語が用いられる時間的局面を〈開始〉〈中途〉〈終結〉の三類に分けて比較を行った結果、ここでも前項動詞に応じて両語の使い分けが認められること、また両語が同じ前項動詞と複合する例についても、時間的局面的観点から見れば使い分けの傾向があることを指摘する。これらの考察結果を踏まえて「くサス」の意味領域の広さがこの語の現代語における使用頻度の低下を招いた原因であることを指摘しており、論者の独自の見解が盛られているものとして高く評価される。なお、前節と本節における論考は、専修大学大学院発行の「文研論集」に「複合動詞『くサス』の意味変遷」（第四三号）および「複合動詞『くサス』『くヤム』の意味考察」（第四四号）として発表されたものである。

三・四「『タチ』と『タツ』の歴史的意味考察」では、複合動詞前項と後項の語順に関する問題が取り上げられている。論者は、中古・中世の文献の中から複合動詞構成要素の前後の順序が入れ替わっているものを集め、その中で比較的用例数の多い「立ち」と「立つ」に着目して、そのような語における意味の相違の有無と、そこにある特徴が認められるかについて精細な考察を加えており、妥当な見解として認められる。なお本節をまとめるに当たって作成された基礎データ「複合動詞の逆引き索引」は付録として巻末に添付されており、利用価値の高いもの

として評価される。

三・五「複合動詞の前項動詞と接頭語の関係」は、複合動詞の「立ち」―「押し」―「差し」―「取り」などのように、前項動詞が実質の意味を失って形式的に用いられるに至ったものを対象として、それらを接頭語と見ることの当否について考察を加えたものである。論者は、上記の前項動詞「立ち」が、「立つ」の形で複合動詞後項にも立ち得ることに注目して、「立ち並ぶ」と「並び立つ」および「立ち添ふ」と「添ひ立つ」の二組を選び、平安時代の用法としては、同じ語が前項・後項のいずれにあっても意味の差は認められないことを個々の用例の解釈を通して確認し、多くの辞書類がこれらの「立ち」を接頭語として扱うことに対して、このような複合動詞前項は接頭語とは性質を異にするものであり、内容語から機能語に変化して行く過程にある「文法化前項動詞」と見なすべきものであることを指摘する。

三・六「複合動詞の後項動詞と補助動詞・接尾語の関係」は、前節で取り上げられた複合動詞前項の問題に対して、本来の意味が希薄になっている複合動詞後項について考察を加えたものである。論者は、後項動詞の機能に関する先行研究の多くがこのような後項動詞を補助動詞あるいは接尾語として扱うことに対して疑義を呈し、補助動詞および接尾語の文法的性質について詳細な検討を加え、さら

に本論三・二および三・三で検証した「サス」の用法に照らして、複合動詞の後項に立つ動詞は補助動詞・接尾語のいずれとも異なり、前節で示したと同じ範疇に属する「文法化後項動詞」として扱うのが適切であることを指摘する。本節は前節とともに、形式化した複合動詞をいかに扱うべきかという問題を論じたもので、論文の構成面から見れば、三・四節までの歴史的研究所の間に内容的な落差のあることは否定できないが、先行研究を丹念に吟味しつつ形式化した複合動詞の文法的解釈に取り組んでいる点に評価すべきものが認められる。

本論文において論者が取り上げた問題の中には、今後の研究課題として残されたものが含まれており、そこにいささか物足りなさを覚えることは否定できないが、日本語の複合動詞の本質を巨視的な立場から把握しようとした点に論者の意欲が窺われ、全体を通して見れば高い評価を与えることができる。

以上の審査結果に基づき、本論文は審査委員の全員一致によって、博士の学位を授与するに値する内容を持つものであると認められるに至った。

Ⅲ 学位授与要記

一、氏名・国籍 朴花美（韓国）

二、学位の種類 博士（文学）

三、学位記番号 博文甲第三二号

四、学位授与の条件 学位規則第四条第一項該当

五、学位授与年月日 平成十七年三月二十二日

六、学位論文題目 複合動詞の歴史的的研究——「〽サ

ス」「ヤム」と「タチ」「ツ」を中心——

七、審査委員

主査 専修大学文学部教授 林義雄

副査 専修大学文学部教授 鈴木丹士郎

副査 専修大学文学部教授 永瀬治郎